

上根崎遺跡

— (主) 岩沼蔵王線自歩道整備事業に伴う発掘調査報告書 —

2012 年 3 月

仙 台 土 木 事 務 所
岩 沼 市 教 育 委 員 会

上根崎遺跡

—発掘調査報告書—

例　　言

1. 本書は宮城県岩沼市長岡字上根崎地内に所在する「上根崎遺跡」発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、主要県道岩沼蔵王線自歩道改良事業に伴う事前の記録保存を目的として実施されたものである。
3. 発掘調査は、仙台土木事務所より業務委託を受けた岩沼市が 2011(平成 23)年 10 月 13 日から 11 月 30 日にかけて実施し、岩沼市教育委員会生涯学習課が調査を担当した。調査対象面積は 242 m²である。
4. 出土品整理及び報告書作成については、2011 年 11 月 1 日から 2012 年 2 月 29 日まで、岩沼市文化財整理室にて行なった。
5. 本書の遺構番号は、遺構の種別に関わらず、現地調査時に付したものを使用した。遺構記号は以下の通りである。

SD ; 溝跡 SK ; 土坑 P ; 小柱穴

6. 本書の執筆・編集は、生涯学習課内での協議の上、川又隆央、熊谷篤が担当した。
7. 本書に掲載した写真は、遺構・遺物とも川又、熊谷、伊藤和雄が撮影した。
8. 発掘調査及び資料整理に際し、次の諸氏・諸機関より御協力・御教示を賜った。記して感謝申し上げます（敬称略）。

千葉 宗久（岩沼市文化財保護委員会）

宮城県教育庁文化財保護課 仙台土木事務所 株式会社田中土木 株式会社森商事
株式会社渡辺サービスセンター

9. 本報告書における遺構・遺物挿図等の指示は次の通りである。
 - (1) 遺構実測図の水糸高は海拔を示す。
 - (2) 縮尺は図に示すとおりである。
 - (3) 遺物観察表の法量における単位は「cm」である。
 - (4) 土層及び土器の色調は「新版標準土色帖」（小川・竹原：1973）に拠った。
10. 今回の発掘調査では測量原点として平面直角座標である岩沼市公共基準点を用いているが、東日本大震災後の使用であるために将来的には若干の齟齬が生じる可能性があることを付記する。
11. 本調査並びに資料整理は以下の人員で行っている（敬称略）。

発掘調査：熊谷篤、伊藤和雄、佐藤孝一、高橋とく子、高橋正人、早坂富美子

資料整理：熊谷篤、伊藤和雄

目 次

第Ⅰ章 遺跡の概観

1. 位置と地理的環境	1
2. 周辺の遺跡と歴史的環境	2

第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査に至る経緯	7
2. 調査経過と方法	9
3. 基本土層	9

第Ⅲ章 発見された遺構と遺物

1. 溝跡	11
2. 土坑	11
3. ピット群	15
4. 遺構外出土遺物	21

第Ⅳ章 まとめ

挿図 目次

第1図 岩沼市の位置と地形分類	1
第2図 岩沼市内遺跡分布図	3
第3図 調査地点位置図	7
第4図 グリッド配置図	8
第5図 遺構全体図	10
第6図 土坑（1）	12
第7図 土坑（2）	14
第8図 ピット群（1）	16
第9図 ピット群（2）	17
第10図出土遺物	21

表目次

第1表 遺跡地名表	3	第2表 遺物観察表	18
-----------	---	-----------	----

写真図版目次

写真図版1	27	写真図版4	30
写真図版2	28	写真図版5	31
写真図版3	29	写真図版6	32

調査要項

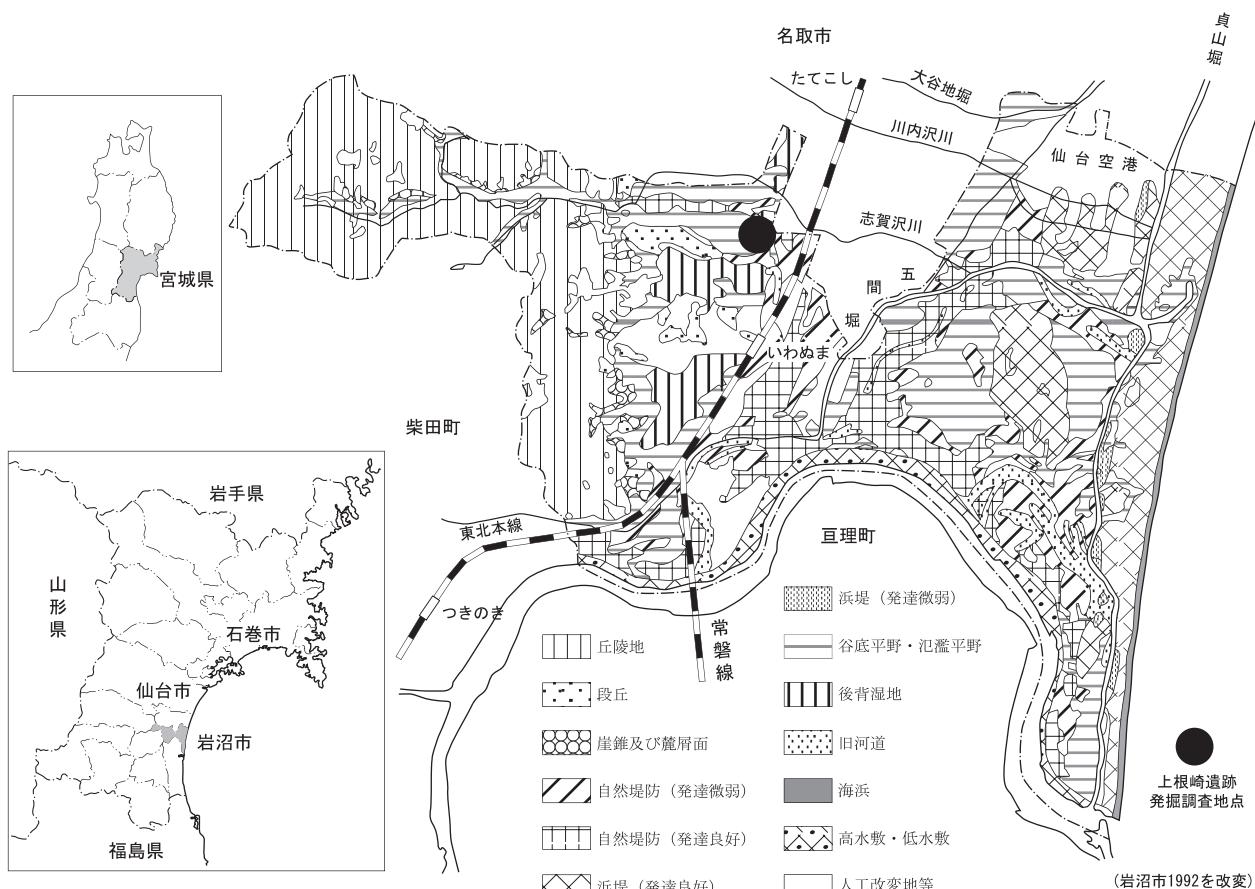
遺跡名	上根崎遺跡（宮城県遺跡登録番号：15030）
遺跡記号	KMZ
所在地	岩沼市長岡字上根崎
調査主体	岩沼市教育委員会
調査協力	宮城県教育庁文化財保護課 仙台土木事務所
調査面積	242 m ²
調査期間	平成23年10月13日～11月30日

第Ⅰ章 遺跡の概観

1. 位置と地理的環境（第1図）

岩沼市は宮城県の南東部に位置し、東は太平洋を臨み、北は名取市、南は阿武隈川を隔てて亘理町と、西は奥羽山脈から派生した陸前丘陵に含まれる高館丘陵で村田町・柴田町と市域を接する。市域の南端を東流する阿武隈川は福島県と栃木県の境に位置する旭岳に端を発し、福島県内を北流して宮城県へと至る大河川であり、その全長は国内6位の239km、流域面積は5400km²を測る。当市は、この阿武隈川が太平洋に注ぐ河口部北岸に位置している。また、当市は古来より浜街道と、東街道が合する地点であるが、現在でも国道4号と同6号、JR東北本線と同常磐線の合流地点となつており、交通要衝の地として知られている。

市域を地質学的に大別すると、西側の山地と東側の広大な沖積地に分けられる。山地は南北に延びる高館丘陵（標高200～300m）・岩沼丘陵（標高10～100m）と、これから東へ舌状に張り出す標高10～30mほどの小規模な段丘面から成る。山地の東側に展開する広大な沖積地は名取平野と通称され、岩沼丘陵の東縁から太平洋までの間に7～8kmの幅をもって発達する。この名取平野は阿武隈川をはじめとし、五間堀川・志賀沢川などの中小河川の堆積作用によって形成され、その沿岸には自然堤防が顕著に発達している。本遺跡地は、岩沼丘陵から東へ舌状に張り出す長岡丘陵の東端付近に占地している。現地表面の海拔は5.0m前後を測る。



第1図 岩沼市の位置と地形分類

2. 周辺の遺跡と歴史的環境（第2図）

本地点周辺では、縄文時代から近世にかけて種々の遺跡が形成されている。以下にこれまで発掘調査によって得られた知見について、時代順にその概略を記す。

【縄文時代】

縄文時代の遺跡としては25の鵜ヶ崎城跡がある。ここでは平成16年に調査を行なった第4地点で、土壘下より埋没小支谷で形成された遺物包含層が発見された。この遺物包含層から出土した土器は、無文で纖維混入が顕著に認められない楓木貝塚下層出土資料に類するものから、纖維混入が顕著で三角文の結節点に円形刺突文を配し内面に条痕文を有する鵜ヶ島台式、そして同様に纖維混入が顕著で外面に縄文、内面に条痕文を有する梨木畠式に比定される土器群であり、総じて早期後葉に位置付けられている。出土した土器の器種は、全容が判明する資料は少ないながらも深鉢と鉢で占められている（川又隆央2005b）。また4の北原遺跡では、平成4年に行なわれた調査の際に、断面形状がフラスコ状を呈する特異な土坑が多数確認されたほか、遺構には伴わないものの前期及び後期に比定される土器が出土しており（小村田達也・三好秀樹他1993）、付近に該期の集落跡の存在を予見させる。

【弥生時代】

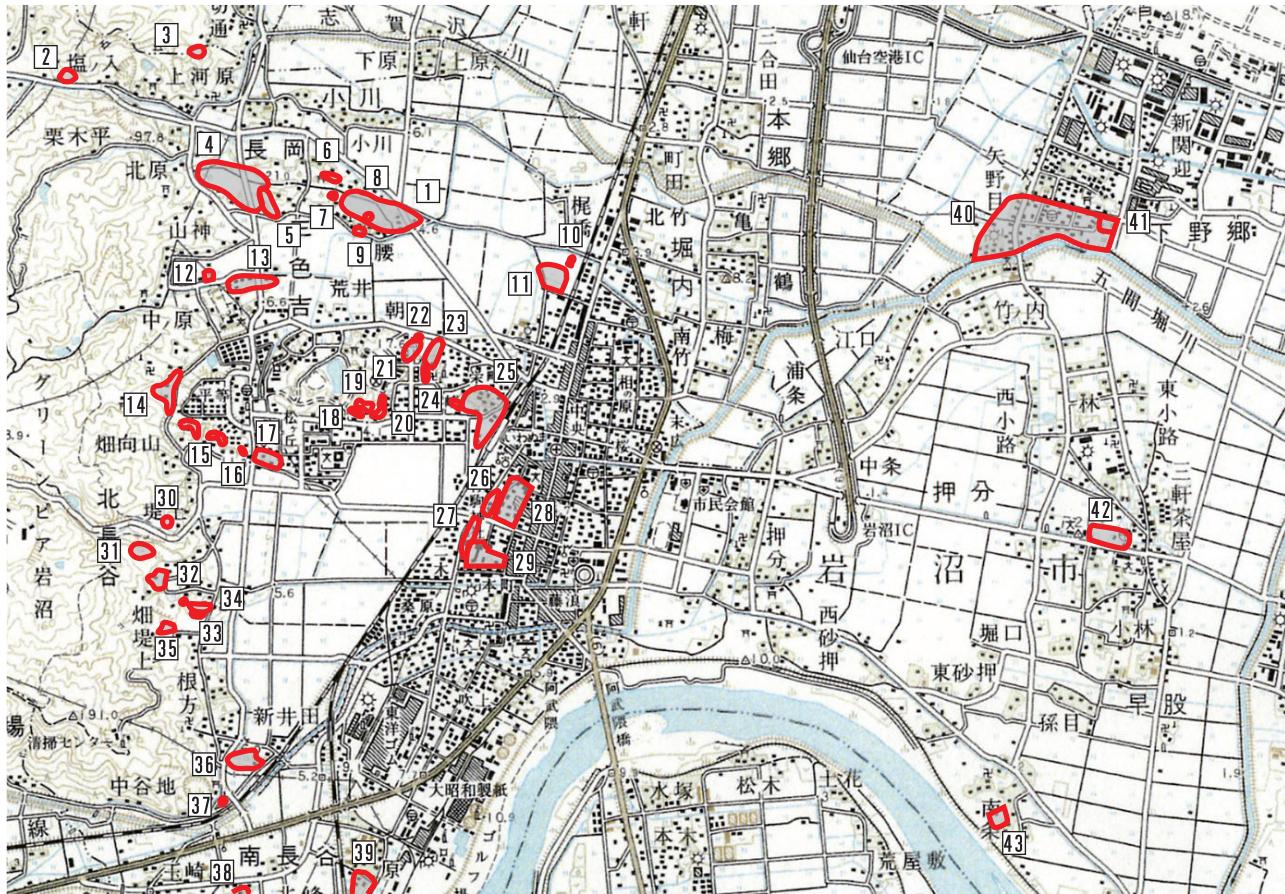
弥生時代の遺物は、21の朝日古墳群における昭和55年時調査の際に、中期後葉の時期を中心とした遺物が多量に出土している（川又隆央2007）。このほか宮城県教育委員会によって調査が実施された4の北原遺跡でも、遺構には伴わないものの中期から後期に比定される土器片が出土している（小村田達也・三好秀樹他1993）。

【古墳時代】

集落遺跡は前期遺跡の北原遺跡のほか、下野郷地区に所在する孫兵衛谷地遺跡が当市で確認されている。4の北原遺跡では、平成4年の県道仙台・岩沼線の改良工事に伴う調査で塩釜式期に比定される堅穴住居跡が36軒確認されている。このうち、10号住居跡からは39個の土玉が出土し、生業として前代から続く稻作のほかに魚撈も行なっていたことが推量されている（小村田達也・三好秀樹他1993）。

高塚古墳としては7の長塚古墳、8の新明塚古墳が、横穴墓としては15の長谷寺横穴墓群、20の引込横穴墓群、24の土ヶ崎横穴墓群、26の丸山横穴墓群、27の二木横穴墓群で発掘調査が実施されている。

新明塚古墳・長塚古墳は、長岡字塚腰の丘陵上に位置する古墳である。新明塚古墳では昭和25年に國學院大學によって調査が実施され、元来は円墳であると考えられていたが、調査の結果では前方後円墳であった可能性が高いことが指摘されている。古墳の長軸は16m、後円部径は9m、前方部の幅は5mであり、墳丘の高さは後円部が3m、前方部が1mを計測する。長塚古墳も昭和26年に國學院大學によって発掘調査が行われ、墳丘全体に黄褐色粘土を用いて構築されていることが確認されている。形状は有段円墳であり、古墳の規模は直径37m、高さは4.2mを計測する。しかしながら、両者からは埴輪などの遺物が出土していないため、作られた年代は不明である（岩沼市1984）。



第2図 岩沼市内遺跡分布図

No.	遺跡名	所在地	立地	種別	時代
1	上根崎遺跡	長岡字上根崎	丘陵麓	散布地	縄文・古墳中
2	下塙ノ入遺跡	志賀字下塙ノ入	丘陵麓	散布地	縄文晩
3	山畑南貝塚	小川字山畑南	丘陵斜面	貝塚	縄文中・後・古代
4	北原遺跡	長岡字北原(ほか)	丘陵	散布地・集落・貝塚	旧石器・縄文・弥生・古墳前
5	杉の内遺跡	三色吉字杉の内(ほか)	丘陵斜面	集落	縄文早・前・弥生・古墳中
6	長塚北遺跡	長岡字上根崎	丘陵	散布地	縄文・古墳・奈良・平安
7	長塚古墳	長岡字台	丘陵斜面	円墳	古墳中
8	新明塚古墳	長岡字塚腰	丘陵斜面	前方後円墳	古墳中
9	長徳寺前遺跡	長岡字塚越	平地	経塚	中世・近世
10	かめ塚古墳	字龟塚	浜堤	前方後円墳	古墳中
11	かめ塚西遺跡	字龟塚	浜堤	散布地	弥生・古墳
12	中ノ原遺跡	三色吉字中ノ原(ほか)	沖積平野	墓	中世
13	熊野遺跡	三色吉字熊野	丘陵麓	散布地	古代
14	竹倉部遺跡	三色吉字竹倉部	丘陵麓	散布地	古墳・奈良・平安
15	長谷寺横穴墓群	北長谷字畑向山	丘陵斜面	横穴墓群	古墳後
16	平等山横穴墓群	三色吉字畑新田	丘陵斜面	横穴墓群	古墳後
17	新田遺跡	松ヶ丘一丁目	丘陵斜面	散布地	縄文・古墳・古代
18	白山横穴墓群	土ヶ崎四丁目(ほか)	丘陵尾根	横穴墓群	古墳後
19	白山古墳	字朝日	丘陵	前方後円墳	古墳
20	引込横穴墓群	土ヶ崎四丁目	丘陵斜面	横穴墓群	古墳後
21	朝日古墳群	朝日二丁目	丘陵麓	散布地・円墳	弥生・古墳・中世
22	鷺崎横穴墓群	朝日二丁目	丘陵斜面	横穴墓群	古墳

No.	遺跡名	所在地	立地	種別	時代
23	朝日遺跡	朝日一丁目	丘陵	散布地	古墳・古代
24	土ヶ崎横穴墓群	土ヶ崎二丁目	丘陵斜面	横穴墓群	古墳後
25	鶴ヶ崎城跡	栄町一丁目	丘陵	城館	縄文早・中・中世・近世
26	丸山横穴墓群	二木二丁目	自然堤防	横穴墓群	古墳後
27	二木横穴墓群	二木二丁目	自然堤防	横穴墓群	古墳後
28	丸山遺跡	二木	自然堤防	集落跡	中世・近世
29	竹駒神社境内遺跡	稻荷町	自然堤防	社寺	近世
30	古閑山遺跡	北長谷字古閑山	丘陵斜面	散布地	弥生・奈良
31	新館跡	北長谷字館下	丘陵	城館	中世
32	新館前遺跡	北長谷字畑上	丘陵斜面	散布地	縄文～平安
33	畑堤上横穴墓群	北長谷字畑上	丘陵斜面	横穴墓群	古墳後
34	畑堤上貝塚	北長谷字畑上	丘陵斜面	貝塚	縄文早・前・古代
35	根方泉遺跡	南長谷字泉	丘陵麓	散布地	弥生
36	長谷小館跡	南長谷字蛭	丘陵	城館	室町
37	東平王塚古墳	南長谷字京	丘陵麓	前方後円墳	古墳
38	南玉崎遺跡	南長谷字北上	自然堤防	散布地	古代
39	原遺跡	南長谷字中原(ほか)	自然堤防	散布地	平安
40	下野郷館跡	下野郷字館内・館外	浜堤	城館	古代・中世・近世
41	船外遺跡	下野郷字館外	浜堤	散布地	古代
42	新田東遺跡	押分子新田東	浜堤	散布地	奈良・中世・近世
43	西須賀原遺跡	早股字西須賀原	浜堤	散布地	古代

一方、横穴墓群は岩沼丘陵から東西に派生する低位丘陵斜面の泥岩層露頭面で多く造営され、現在までのところ9箇所で確認されている（消滅した鷺崎、石垣山横穴墓群を含む）。これらの横穴墓は、構造上では平面形が方形乃至不整方形、断面はドーム型であり、玄室内に棺座を有することが大きな共通項として挙げられる。出土遺物では土師器よりも須恵器の出土量が、圧倒的に凌駕するという特色を持ち、中でも湖西地域を中心とした東海諸窯、または猿投窯産と推測されるプラスコ形瓶など製品が県内の横穴墓群出土資料と比べた場合、比較的多く存在している（佐藤敏幸・大久保弥生2007）。また二木横穴墓群では頭椎太刀の柄頭の一部が（鍛冶一郎・佐藤宏一他1962）、長谷寺横穴墓群では全国的に稀少な「子持ち平瓶」が出土し（小野力・志間泰治1968）、さらに引込横穴墓群では轡の一部が出土（渡辺清子2000）するなど、前段階でも東北地方最大級の古墳が造営された当地域は、『国造本紀』には未記載であるが、地方有力者が存在していた可能性が高い。

【古代】

古代の遺構・遺物に関しては、現時点での発掘調査によって得られた知見は少ない。しかしながら出土状況は不明ながらも二木横穴墓群、長谷寺横穴墓群の出土資料中には8世紀代に属する須恵器壺・蓋などが認められる。

なお、『延喜式』に東海道の駅家として記載され、また多賀城跡より出土した過所木簡（高野芳弘・佐藤和彦1985）でその名が知られる「玉前割」は、本市の南部（現在の玉崎地区）にその存在が比定されるが、その東側に展開する39の原遺跡では平成17・18年に実施された下水道工事の際に古代の遺構・遺物が存在していることが明らかとなった。ここではこれまで竪穴住居跡のカマドと考えられる焼土遺構、溝跡、柱穴などの遺構と非ロクロ・ロクロ整形の土師器、須恵器などが出土している。出土した遺物は全て古代の範疇として捉えられ、前時代のものを含まないことから、ここで発見された遺構群は「玉前駅」、あるいは「玉前割」の設置・機能時と密接に関連した集落である可能性が高い。

また北原遺跡では、これまでに1軒の竪穴住居跡が調査されている。この住居跡は両袖に川原石を用いて構築したカマドを有し、支脚には川原石の上に赤焼土器壺を逆位に被せて使用している。出土遺物はロクロ土師器と赤焼土器であり、それぞれの形状から9世紀後半の時期と考えられる。なおこの地域は10世紀前半に編纂された『和妙類聚抄』で記載される「指賀郷」に含まれており、今後も集落遺跡が発見される可能性が高い。

【中世】

発掘調査で中世遺跡の存在が確認できたのは、25の鵜ヶ崎城跡、21の朝日古墳群、28の丸山遺跡、12の中ノ原遺跡、及び40の下野郷館跡、29の竹駒神社境内遺跡、43の西須賀原遺跡である。鵜ヶ崎城跡では第4地点の調査で15世紀前半頃の年代観が与えられる青磁盤や常滑焼甕片などが出土し、さらに中世から近世の時期にかけて補・改修されたと推定される土壘が確認された。この土壘の最終形態は基底部9.3mで、平場内よりの比高差は約2mを測る（川又隆央2005b）。朝日古墳群では平成17年に調査が実施された地点の下位平場から北宋錢などを伴う土葬土壙墓群が確認されている。土葬土壙墓は長方形と隅丸方形、不定形の形状があり、埋葬形態の異なる葬送が行われている。この墓域の機能時期は13世紀後半～15世紀代と考えられている（川又隆央2007）。また

同遺跡では平成21年に実施した土砂採取に伴う調査の際にも在地産中世陶器甕片が出土したほか、斜面の一部を平場状に造り出した箇所では柱穴群も発見されている。丸山遺跡では平成18年度実施の調査の時に遺構には帰属しないものの、白石古窯跡群の製品と推定される甕片が出土している。また市民図書館建設に伴う平成20年度の調査では、ほぼ同位置で重複して作られていた区画性の高い溝跡の最古の段階より13世紀後半から16世紀後半にかけての遺物が出土している。(川又隆央・熊谷篤2010)。中ノ原遺跡では発掘調査は未実施であるが、平成17年度に実施した分布調査の折に移設された板碑の付近より、内面に火葬骨が付着した在地産中世陶器甕片が採取されている。また地権者によって板碑下部から出土した、火葬骨を充填した白石古窯跡群の短頸壺が保管されていた。これら2種類の骨蔵器は、基壇状の高まりに立つ2基の板碑に伴って埋納されたものと推量している(川又隆央・熊谷篤2009)。このほか市域東部に存在する下野郷館跡では平成12~15年度にかけて行なわれた調査の際に、13世紀後半頃の年代観が与えられる白石古窯跡群甕片のほか、12世紀後半の年代観を有する白磁碗片、及び13世紀代と考えられる青磁碗片が出土していることから、五間堀川の自然堤防上に中世遺跡が営まれていた可能性が指摘されている(川又隆央・小泉博明2004)。また市域北西部の山中に所在する岩藏寺薬師堂の背後にある平場には、塚状の集石を伴って凝灰岩製の板碑が立ち、周囲に散在する小型板碑を含め7基が境内域に存在しているが、板碑を造立する立地の特異性や、板碑分布のあり方等から中世における地域靈場として機能していた可能性も考慮されている(川又隆央2005c、石黒伸一郎2009)。

【近世】

近世の遺構・遺物は、25の鵜ヶ崎城跡、21の朝日古墳群、28の丸山遺跡、9の長徳寺前遺跡、29の竹駒神社境内遺跡、及び40の下野郷館跡、43の西須賀原遺跡で確認されている。鵜ヶ崎城跡ではこれまで4地点で調査が行われているが、このうち第1地点では東北福祉大学によって平成23年まで11次に渡って調査が実施されている(吉井宏他2002~2011)。ここでは丘陵頂部の平場で南北に走方向を持つ石列と、これの西側でほぼ併走しながら北側では東側に屈曲する溝跡が確認されている。またこの東側では礎石建物跡や整地面などが確認されている。さらに第5次・第7次では小穴に大堀相馬焼碗を、第6次調査では同じく小穴に大堀相馬焼碗を正位で埋設し、これにかわらけ蓋をするように被せた状態のものが検出された。この3例は現時点では地鎮関連の遺構として解釈されている(吉井宏他2006・2007・2008)。このほか第2地点では掘立柱建物跡、土坑、及び近現代の大規模な地形改変の痕跡が確認され(川又隆央2004a)、第3地点では掘立柱建物跡、魚骨を含む溝跡などが発見されている(川又隆央2004b)。上記の3地点ではいずれも18世紀後葉~19世紀代の遺物を主体として出土している。長徳寺前遺跡では、平成15年に曹洞宗龍谷山長徳寺(1657年開山)門前の現市道下より2基の礎石経塚が発見されている。経塚はいずれも墳丘を有しておらず、1号経塚が径1.4mほどの円形、2号経塚は1辺が1.0mほどの方形土坑の底面に厚さ40~60cmにわたって礎石経が埋置されていた。出土した礎石経の総点数は、1号経塚が14,897点、2号経塚は11,479点である。このうち文字判読可能なものは1号経塚で10,089点、2号経塚で6,329点であり、文字の遺存状態はかなり良好である。書写經典については、1号経塚では妙法蓮華經譬喻品第三、方便品第二、信解品第四を中心に書写したものと考えられ、2号経塚では仏説觀普

賢菩薩行法經に関連する文字が多数あり、仏説觀普賢菩薩行法經を中心に、妙法蓮華經各品の代表的な部分を書写したと考えられる。2基の礫石経塚の築造年代は、それぞれ1号経塚が唐津産陶器の年代観から17世紀後半頃、2号経塚が「奉讀誦書寫大乘妙典一百部一字一石金剛塔」の年号（文政7年）から19世紀前半頃と考えられる（川又隆央2005a）。下野郷館跡では、平成12～15年にかけて県道亘理・塩釜線の改良工事に伴って岩沼発掘調査が実施され、主に江戸時代の足軽屋敷にかかるとされる掘立柱建物跡が61棟、井戸跡58基などを検出している。ここで確認された井戸跡は素掘りのものが大半を占めるが、支柱を木材で組み、その外側に竹を立てかけるものが2基確認されている。また溝跡は規模や方向から屋敷地や館跡全体を区画する施設の可能性があると考えられている（川又隆央・小泉博明2004）。竹駒神社境内遺跡では向唐門地点で宝永7年（1710）の伊達吉村による本殿修復に伴う整地面が確認されたほか、旧参道跡や木戸跡、さらには土坑内部に松葉を敷き、その上にアワビ貝を置いて埋設した神事に関連する可能性が考慮される遺構が発見されている（川又隆央2009）。丸山遺跡では市民図書館建設に伴う調査の際に、岩沼要害に連なる家中屋敷の区画溝跡や井戸跡などが発見されている。このうち区画溝跡の一部からは19世紀後半を最新の資料とする多量の陶磁器片が出土しているが、幕末から明治初期の混迷がうかがえる資料として注目される（川又隆央・熊谷篤2010）。玉浦中部地区経営体育成基盤整備事業に伴って実施した西須賀原遺跡の調査では、A区で中世末から近世初頭頃の掘立柱建物跡群とその前面では畠作に関連すると考えられている小溝状遺構群を検出している。またB区では18世紀前半～19世紀後半にかけて営まれた19基の墓壙を検出している。この墓壙群には168枚の銭貨を副葬した事例、寛永通寶鉄波錢と供伴して眼鏡が出土した事例、幼児を納めた棺内を多量の糞殻で充填した事例などが確認されている。また遺構の重複関係から埋葬形態が直葬墓から円形木棺墓へ、そして方形木棺墓へ変遷していく過程がとらえられている（川又隆央・熊谷篤2011）。

【調査地点周辺の地誌について】

今回の調査対象地周辺は、古くは10世紀前半の成立とされる『和妙類聚抄』中の、名取郡指賀郷に含まれていると考えられる。鎌倉、南北朝時代の様相については不明な点が多いが、名取郡が伊達家の所領に編入されて以降は、「長岡」の資料上の初見である永正十七年（1520）の年号を有する『伊達家文書』「伊達植宗安堵状案」（岡田清一2010）でみられるように、様々な家臣の知行地が点在する状況であったと推量できる（註1）。

近世以降になると、「長岡」は村として位置付けられ、岩沼館主の拝領するところとなり、『陸奥国仙台領国絵図』や田村氏の知行範囲を描いた『田村宗良知行地絵図』にも村名を見ることができる。また肝入職は長徳寺門前の礫石経碑にも見られる長岡村の古住氏のほか、志賀村の肝入である高橋家、小川村の肝入である布田家など隣接する他村の肝入も兼務していた。そして明治22年の市町村制施行によって、現在の市北部・西部域の千貫村と改編されている。

第Ⅱ章 調査の概要

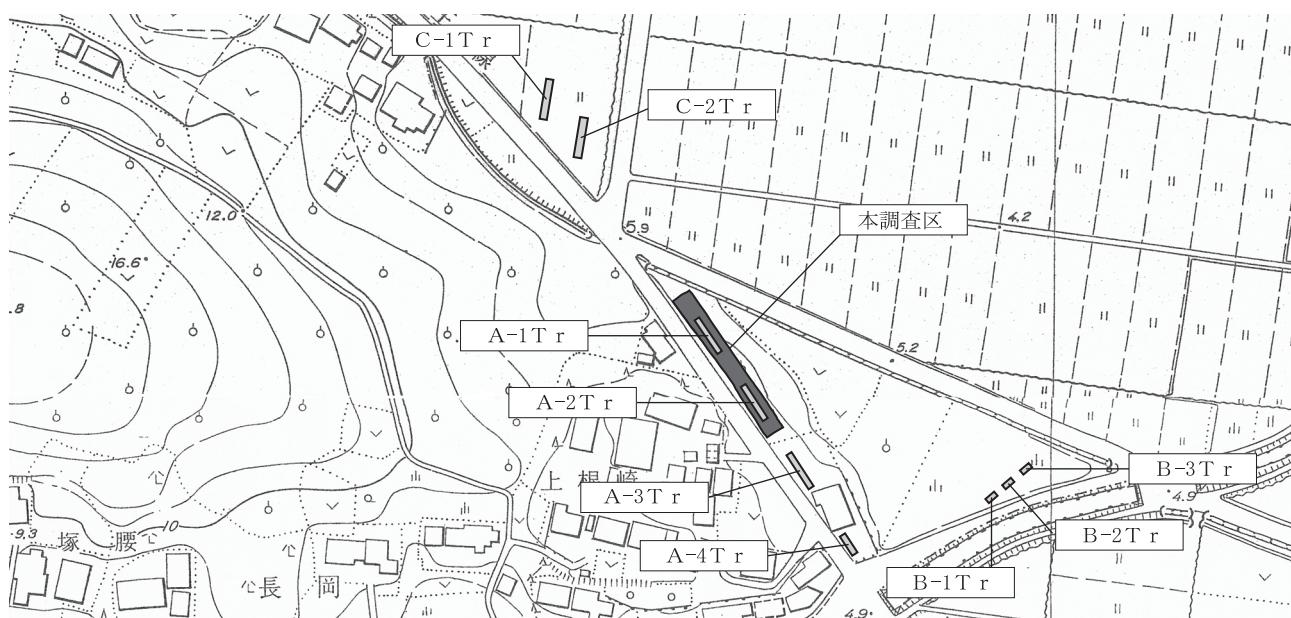
1. 調査に至る経緯（第3図）

平成22年に県道岩沼藏王線自歩道整備事業についての照会が仙台土木事務所からあり、岩沼市教育委員会では対象地の一部が上根崎遺跡の範囲に含まれている旨を回答した。その後仙台土木事務所より平成22年10月22日付けで「(主) 岩沼藏王線自歩道整備計画と埋蔵文化財のかかわりについて」の協議書が提出され、ついで10月26日付けで文化財保護法第94条に基づく発掘通知が提出された。これを受けた12月9日に宮城県教育庁文化財保護課、仙台土木事務所、岩沼市教育委員会の三者で現地協議を行った結果、遺跡地内及び隣接地の3ヶ所で遺構・遺物の有無等を把握することを目的とした確認調査を実施することとなった。

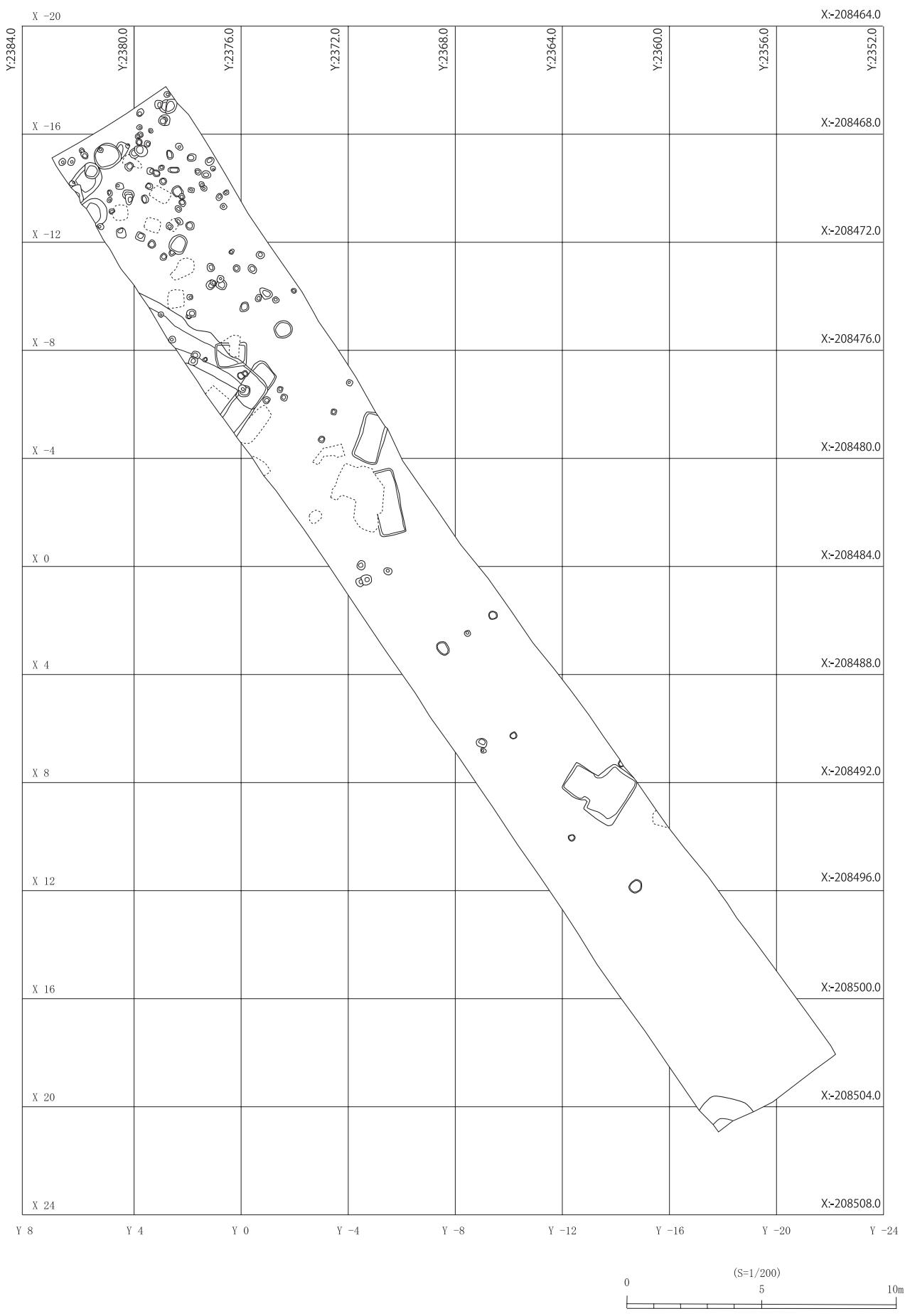
確認調査は平成22年12月14・15日にかけて実施した。調査はまずA区からトレンチを設定し、重機を使用して耕作土等の表土を除去した後、人力で遺構精査を実施した。以下に各区での概要を記す。

A区

県道の東側に平行して、 $2 \times 10\text{m}$ のトレンチを北から4箇所設定した。最も北側に位置する1トレンチ、2トレンチでは、現地表下20cmほどで明褐色ローム質土を確認し、遺構精査を行ったところ、竪穴住居跡の可能性が考えられる遺構が2基確認された。この遺構覆土中からはロクロ成形による内面黒色処理の土師器片が出土している。また掘削時には須恵器甕片と土師器小片が出土している。なお2トレンチ南側からは明褐色ローム質土は検出されておらず、3トレンチにおいても明褐色ローム質土が確認できなかったことから埋没谷が存在している可能性が考えられる。この堆積土中からは遺物は一切確認されていない。3トレンチでは現地表下約60cmまで既存住宅に伴うと考えられる山砂が認められ、これを除去した下からは2トレンチ南側で確認されたローム漸



第3図 調査地点位置図



第4図 グリット配置図

移層と考えられる暗褐色ローム質土を検出している。この土層上面で遺構精査を行ったが遺構・遺物ともに未発見である。最も南側に設定した4トレンチでは、現地表下約40cmほどで明褐色ローム質土を確認し遺構精査を行ったが、3トレンチ同様に遺構・遺物ともに未発見である。

B区

B区は対象地北東隅部での取付道路敷設予定部分に設定した。 $2 \times 3\text{ m}$ トレンチ3箇所で掘削を行ったが、いずれのトレンチでも現地表下110~120cmまではコンクリート大塊を含む現代客土であり、その下からは植物遺体を包含する「スクモ」層が確認された。遺構・遺物ともに一切確認されていない。

C区

岩沼市小川地区及び名取市方面へと向かう農道の西側に位置する。ここでは $2 \times 5\text{ m}$ のトレンチを2箇所設定して掘削を行ったが、現地表下170cmまではコンクリート大塊を含む現代客土であり、その直下では旧水田面が存在していた。さらにこの水田面の下では湿地状の堆積と見られる植物遺体を包含する暗褐色・黒褐色粘質土が認められ、現地表下2mでは「スクモ」層が確認された。B区同様に遺構・遺物ともに一切確認されていない。

以上の調査結果から、尾根筋付近のA区1・2トレンチでは工事着手以前に本格調査が必要である、との見解に達し、平成23年度に記録保存を目的とした発掘調査を実施する運びとなった。

2. 調査経過と方法（第4図）

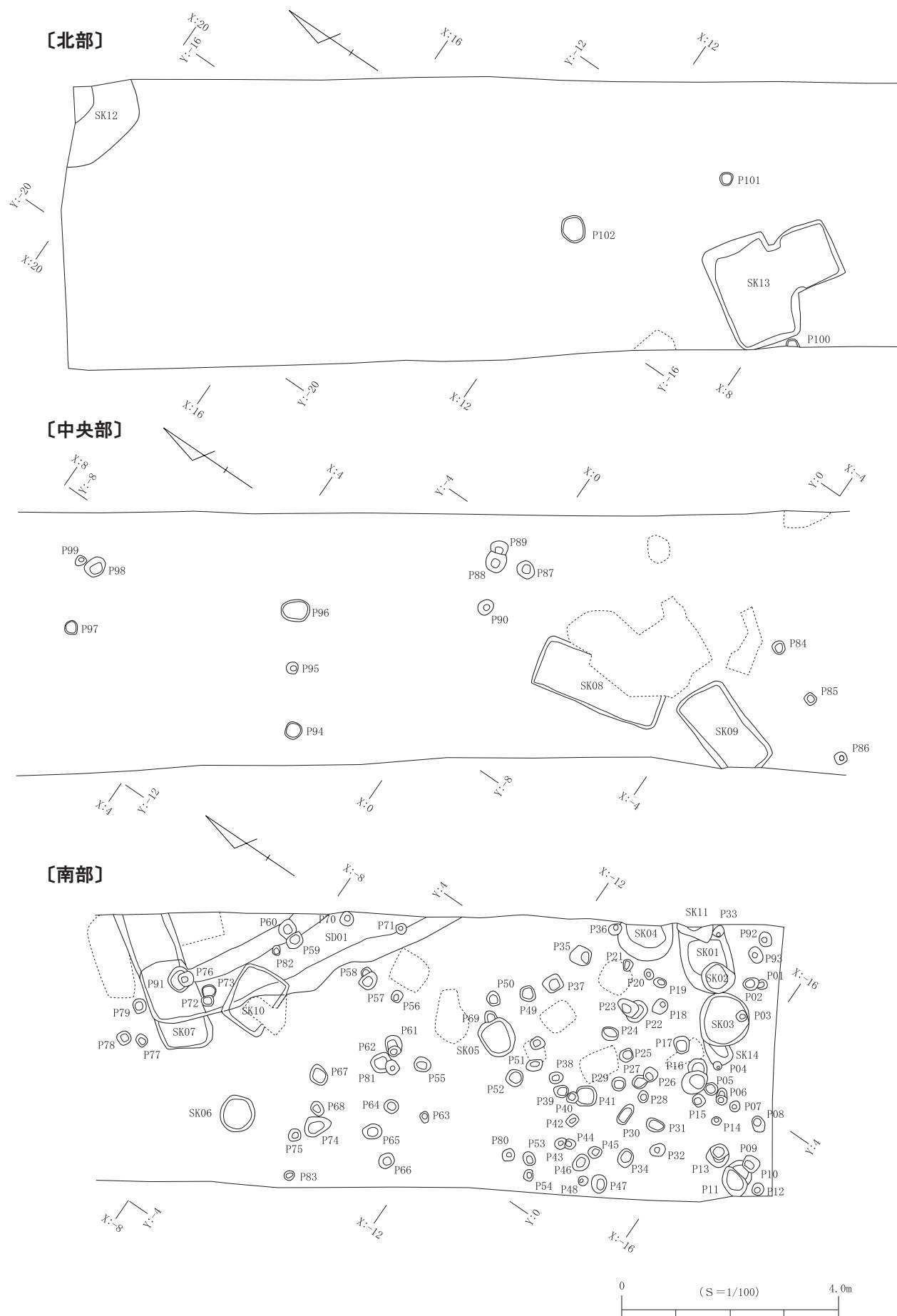
本格調査は掘削以前に現地付近での国家座標及び海拔の移動を終了したのちの平成23年11月1日から重機を使用した表土掘削を開始した。設定した調査区の面積は 242 m^2 である。その後、人力によって遺構精査作業を開始し、遺構確認状況の全景撮影を11月9日に行ったのち、遺構の掘り下げ、土層図及び平面図の作成を隨時実施し、11月21日に完掘状況の全景撮影を行った。その後も隨時遺構写真撮影、遺構図面の作成作業を経て、11月30日に調査及び機材搬出を終了した。

本調査で使用した測量軸の設定に関しては、国家座標を使用した。使用した測量原点は岩沼市公共基準点2-050（X；-208597.500・Y；2347.353）と同3-114である。そして調査区内のX；-208484.000・Y；2376.000の地点にX0Y0杭を設定し、4mごとにグリッドライン名を附した。また各グリッドの名称は北東隅の交点を採用した。

出土品の整理作業・報告書の作成は2011年11月1日から2012年2月28日にかけて岩沼市文化財展示室内で行なった。

3. 基本土層（第5図）

本地点では近現代において大規模に地形が改変されていることから表土の層厚が僅かに5~20cmほどという状況であった。この表土下では、中央付近で愛島パミスの露頭を挟んだ東西で明褐色のローム質土が存在している。さらにその東側は低地部へかけて傾斜していく様相を呈し、ローム漸移層に近似する暗褐色ローム質土が存在している。



第5図 遺構全体図

第Ⅲ章 発見された遺構と遺物

本調査では前章でも触れたように、近現代における地形改変のために表土は僅か5～20cmほどの厚みで、その直下では旧表土等はみられず直に明褐色及び暗褐色ローム質土を検出するという状況であった。このため検出された溝跡、土坑の大多数は、廃棄時の姿をとどめていない。

調査で確認された遺構の内訳は、溝跡1条、土坑14基のほか、小穴（ピット）102口である。現状での遺構の分布状況は北側では希薄で、南側にかけて集中する傾向にあるが、これは中央部より北側が旧地形では長岡丘陵より派生していた尾根筋にあたり、斜面部にあたる南側と比べてより大規模に削平されたことに起因すると考えられる。

以下、検出遺構・出土遺物について確認された遺構ごとに記述する。なお、遺構の方位は長軸方向を主軸方位とし、北からの振れをN-○° -WまたはN-○° -Eに統一して表記する。

なお、個々の遺構の年代観については遺構出土の遺物が僅少であることからここでは明示できないが、現時点では出土遺物の状況、柱穴や柱痕跡の規模から概ね中世以降の所産として認識している。

a .溝跡

SD01溝跡（第9図）

調査区中央東部に位置するL字状の溝跡で、北側は調査区外となる。規模は総長6.5m、上幅0.9～1.7m、下幅60～70cmを測る。主軸方位は東辺でN-5° -W、南辺でN-84° -E。確認面からの深さは5～15cmであり、断面形状は浅い皿状を呈する。堆積土は1層であり、人為的埋土である。L字状を呈するということから調査区外の施設に伴う区画溝の可能性が考慮される。

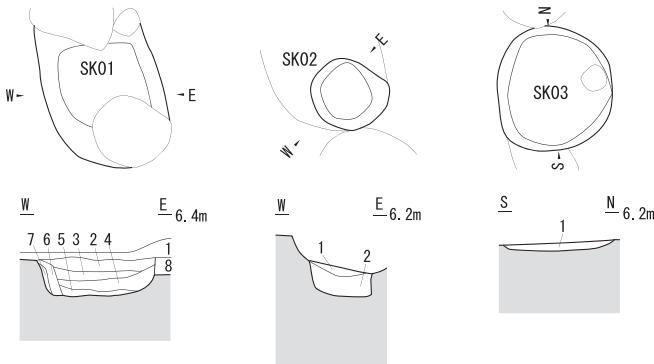
遺物は第10図7の陶器製擂鉢が1点出土している。

b .土坑

SK01土坑（第6図）

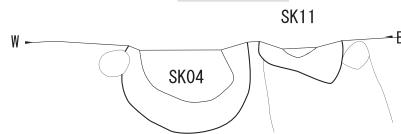
調査区南東部に位置する。SK02、SK11と重複し、SK02より新しく、SK11より古い。東側をSK11に切られるために全体の形状規模については不明な点もあるが、平面形状は長円形を呈するものと思われ、規模は短軸94cm、確認面からの深さは29cmである。主軸方位はN-44° -E。断面形状は浅いU字状を呈する。堆積土は6層に分層でき、全て人為的埋土である。

遺物は第10図1・2を含む弥生土器壺片が3点出土したほか、上層付近からウマの歯が1点出土している。



SK01土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	シルト 耕作土。
2	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト 炭化物・焼土粒微量含む。
3	にぶい黄褐色	(10YR4/6)	粘質シルト ロームブロックを極めて多量含む。
4	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト 炭化物微量、ローム粒を少量含む。
5	黒褐色	(10YR2/3)	粘質シルト 炭化物・ローム粒微量含む。
6	黒褐色	(10YR3/1)	粘質シルト ロームブロック微量含む。
7	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト 炭化物微量含む。
8	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト 焼土粒微量含む。



SK02土層注記

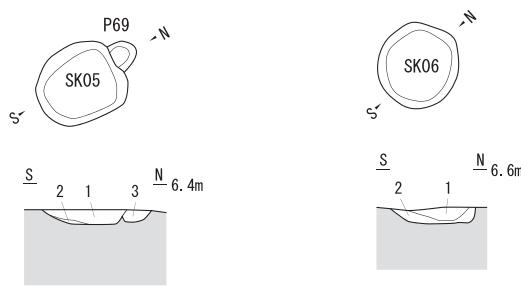
層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト ローム粒少量含む。
2	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト ロームブロック少量含む。

SK03土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト ロームブロック少量含む。

SK04・SK11土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	褐色	(10YR4/1)	シルト 現表土。
2	暗褐色	(10YR3/3)	シルト 耕作土。
3	黒褐色	(10YR3/2)	シルト ローム粒微量含む。SK04覆土。
4	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト ローム粒少量、炭化物微量含む。SK04覆土。
5	黒褐色	(10YR3/1)	粘質シルト ローム粒・炭化物少量、焼土粒微量含む。SK04覆土。
6	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト 燒土・炭化物多量含む。炭化物・ローム粒微量含む。SK11覆土。
7	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト ロームブロック極めて多量含む。SK11覆土。
8	黒褐色	(10YR2/1)	粘質シルト 暗褐色ロームブロックやや多く含む。SK11覆土。
9	黒褐色	(10YR3/1)	粘質シルト 暗褐色ロームブロック多量、炭化物微量含む。SK11覆土。
10	暗褐色	(10YR3/3)	シルト 炭化物微量含む。

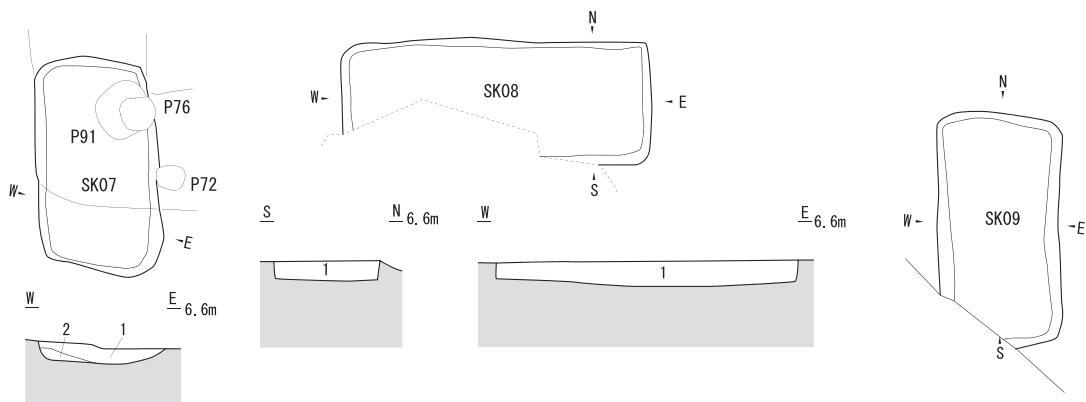


SK04・P69土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/1)	粘質シルト ローム粒少量、炭化物微量含む。SK05覆土。
2	にぶい黄褐色	(10YR4/2)	粘質シルト ロームブロック主体。黒褐色粘土少量含む。SK05覆土。
3	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト ロームブロック多量含む。P69覆土。

SK06土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト 炭化物少量含む。
2	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト ローム粒少量、炭化物微量含む。



SK07土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト ロームブロック多量、炭化物微量含む。
2	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト ロームブロック多量、炭化物微量含む。

SK08土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト ロームブロック極めて多量含む。

SK09土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト ロームブロック極めて多量含む。

0 (1/60) 2.0m

第6図 土坑(1)

SK02土坑（第6図）

調査区南東部に位置する。SK01の底面で検出しており、これより古い。平面形状は橢円形で、規模は長軸59cm、短軸55cm、確認面からの深さは45.5cmである。主軸方位はN-21° -E。断面形状はU字状を呈する。堆積土は2層に分層でき、全て人為的埋土であるが、いずれも極めて硬化していた。

遺物は第10図3の中世陶器甕片が1点出土したほか、細片のため図示不可能であるが弥生土器壺片が2点出土している。

SK03土坑（第6図）

調査区南東部に位置する。SK14、P03と重複し、SK14より新しく、P03より古い。平面形状は橢円形で、規模は長軸100cm、短軸91cm、確認面からの深さは12cmである。主軸方位はN-53° -E。断面形状は浅い皿状を呈する。堆積土は1層であり、人為的埋土である。

遺物は出土していない。

SK04土坑（第6図）

調査区南東壁際に位置する。P36と重複し、これより古い。調査区東側へさらに展開するため平面形状、規模は不明な点が多いが、短軸102cm、確認面からの深さは22cmである。断面形状は浅い皿状を呈する。堆積土は3層に分層でき、人為的埋土であるが、いずれも極めて硬化していた。

遺物は出土していない。

SK05土坑（第6図）

調査区南側中央部に位置する。P69と重複し、これより新しい。平面形状は橢円形で、規模は長軸72cm、短軸63cm、確認面からの深さは17.5cmである。主軸方位はN-28° -E。断面形状は浅い皿状を呈する。堆積土は2層に分層でき、いずれも人為的埋土である。

遺物は出土していない。

SK06土坑（第6図）

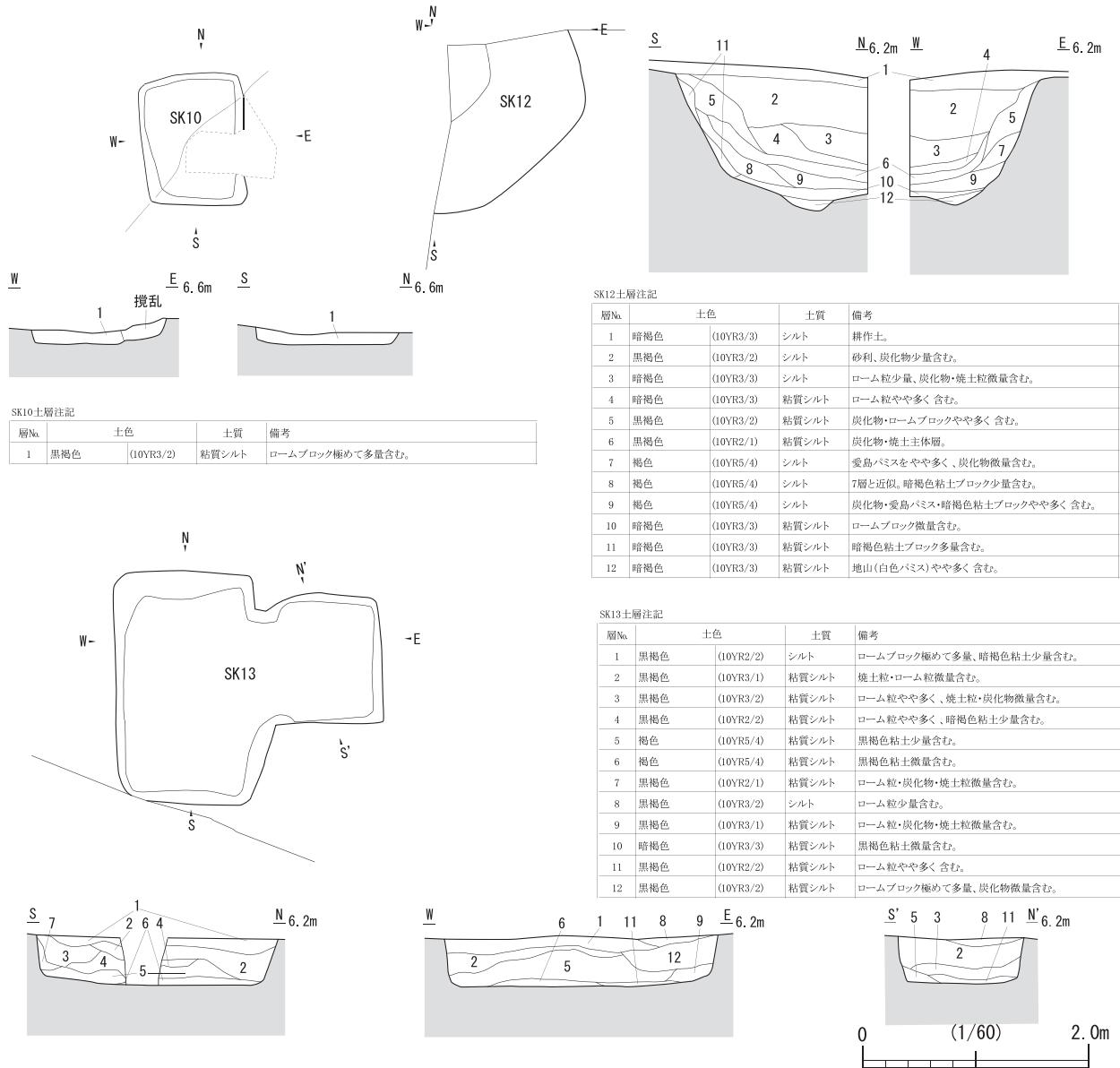
調査区南側西寄りに位置し、重複する遺構は無い。平面形状は橢円形で、規模は長軸68cm、短軸64cm、確認面からの深さは13cmである。主軸方位はN-44° -E。断面形状は浅い皿状を呈する。堆積土は2層に分層でき、いずれも人為的埋土である。

遺物は出土していない。

SK07土坑（第6図）

調査区南側中央部に位置する。SD01、P76・P94と重複し、SD01より古く、P76・P94より新しい。平面形状は長方形で、規模は長軸170cm、短軸100cm、確認面からの深さは17.5cmである。主軸方位はN-36° -E。断面形状は箱形を呈する。堆積土は2層に分層でき、全て人為的埋土である。

遺物は出土していない。



第7図 土坑（2）

SK08土坑（第6図）

調査区南側中央部南寄りに位置する。攪乱によって南東部分を失うが、平面形状は長方形で、規模は長軸246cm、短軸100cm、確認面からの深さは21.5cmである。主軸方位はN-12° W。断面形状は箱形を呈する。堆積土は1層であり、人為的埋土である。

遺物は出土していない。

SK09土坑（第6図）

調査区南側中央部南寄りに位置する。遺構の南西隅部分は調査区外へ展開するが、平面形状は長方形で、規模は長軸186cm、短軸94cm、確認面からの深さは11cmである。主軸方位はN-19° -E。断面形状は箱形を呈する。堆積土は1層であり、人為的埋土である。

遺物は第10図4の中世陶器甕片が出土したほか、細片のため図示不可能であるが内面黒色処理がされる土師器壊片が1点出土している。

SK10土坑（第7図）

調査区南側北寄りに位置する。攪乱によって遺構の南辺の一部を失う。またSD01と重複し、これより古い。平面形状は長方形で、規模は長軸117cm、短軸91cm、確認面からの深さは17.5cmである。主軸方位はN-89° W。断面形状は箱形を呈する。堆積土は1層であり、人為的埋土である。

遺物は火打石が1点出土している。

SK11土坑（第6図）

調査区南端部東側に位置する。SK01と重複し、これより新しい。遺構の大部分は調査区外へ展開するため形状・規模ともに不明な点が多く、僅かに確認面からの深さ32.5cmを計測したのみである。断面形状はU字状を呈する。堆積土は4層に分層でき、全て人為的埋土であるが、最下層は極めて硬化していた。

遺物は出土していない。

SK12土坑（第7図）

調査区北端東側に位置する。遺構の大部分は調査区外へ展開するため形状・規模ともに不明な点が多く、僅かに確認面からの深さ111cmを計測したのみである。堆積土は11層に分層でき、全て人為的埋土であるが、層中の第6層では炭化物と焼土塊が多量に含まれていた。

遺物は器種不明の土師器小片が2点出土している。

SK13土坑（第7図）

調査区北部南寄りに位置する。本址は平成22年度の確認調査時に東辺が確認され、当時は竪穴住居跡と認識していた。また本調査時に再精査を行った結果、当初は2基の長方形土坑が重複していると考えていたが、平面及び断面の観察では埋没時の明瞭な前後関係が認められず、完掘状況の底面レベルでもほぼ差異がないことから同時期の機能・廃絶を想定した。規模は東西方向長軸240cm、南北方向短軸210cm、確認面からの深さは47cmである。主軸方位はN-52° -W。断面形状は箱形を呈する。堆積土は12層に分層でき、全て人為的埋土である。

遺物は第10図5のロクロ成形の土師器坏片、6の施釉陶器碗片のほか、器種不明の土器片が1点出土している。

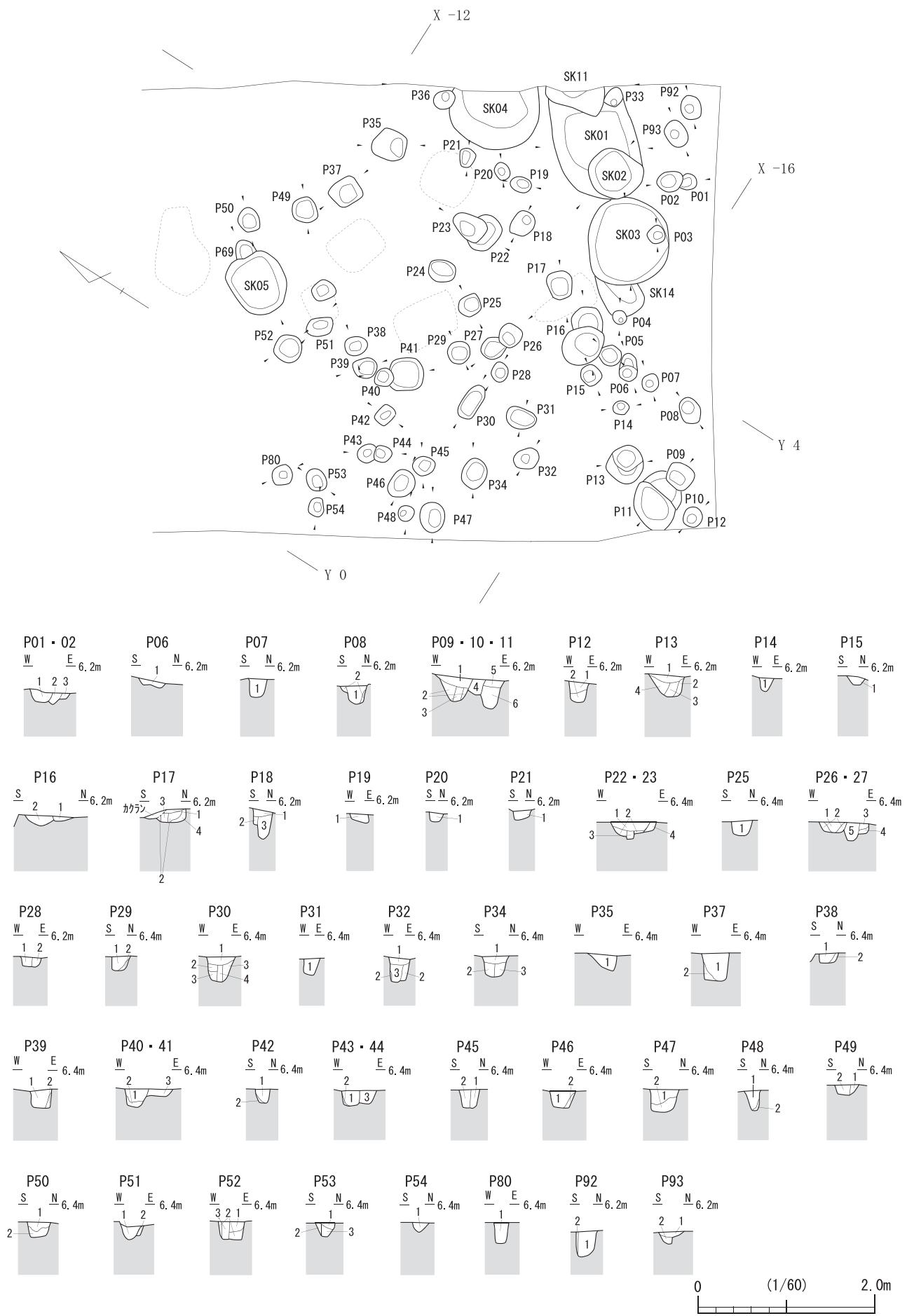
SK14土坑（第8図）

調査区南部南寄りに位置する。SK03・P04と重複し、これより古い。東側の一部をSK03によって失われるが平面形状は楕円形を呈すると考えられ、規模は短軸45cm、確認面からの深さは10cmである。断面形状は浅い皿状を呈する。堆積土は1層であり、人為的埋土である。

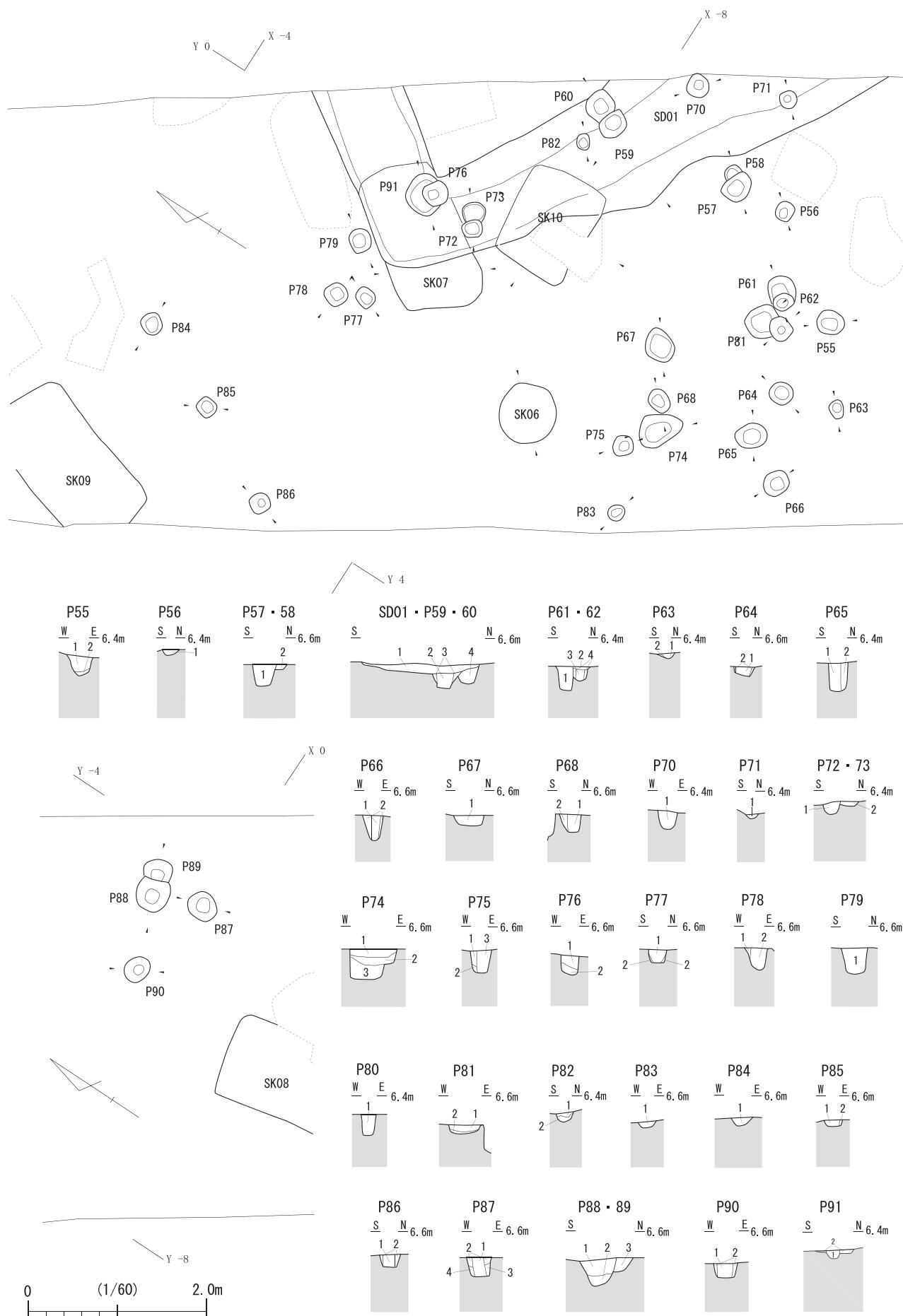
遺物は出土していない。

c . 小穴群（ピット）（第9・10図）

今回の調査では南部を中心として小穴を102口確認した。これらの中には明瞭に柱痕跡を留めるものも含まれることから、掘立柱建物跡などの一部と考えられるが、調査区内での復元は困難であった。またこれらの小穴群は、ほぼ全てが黒褐色粘質シルトを覆土としていることから、近接した時期に機能していたと思われ、その時期については下記に記すように最新の遺物が中世陶器であるこ



第8図 ピット群 (1)



第9図 ピット群(2)

P01・02土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト 暗褐色ローム粒やや多く含む。P02覆土。
2	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト 炭化物微量含む。柱痕跡。P01覆土。
3	黒褐色	(10YR3/1)	粘質シルト ロームブロック少量含む。P01覆土。

P06土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト 暗褐色ローム粒やや多く含む。

P07土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/1)	粘質シルト 暗褐色ロームブロック少量含む。

P08土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト ロームブロック少量含む。柱痕跡。
2	黒褐色	(10YR3/1)	粘質シルト 暗褐色ローム粒少量含む。

P09・10・11土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/1)	粘質シルト 暗褐色ローム粒やや多く含む。
2	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト 暗褐色ローム粒極めて多量含む。
3	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト 炭化物微量含む。柱痕跡。
4	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト 黒褐色粘土粒少量含む。
5	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト 暗褐色ローム粒少量含む。
6	黒褐色	(10YR3/1)	粘質シルト 暗褐色ロームブロック多量含む。

P12土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト 暗褐色ローム粒少量含む。
2	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト 暗褐色ローム粒多量含む。

P13土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト 暗褐色ローム粒微量含む。
2	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト 暗褐色ローム粒多量含む。
3	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト 炭化物微量含む。柱痕跡。
4	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト ロームブロック多量含む。

P14土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト 暗褐色ローム粒微量含む。

P15土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト 焼土粒微量含む。

P16土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/1)	粘質シルト 炭化物微量含む。
2	黒褐色	(10YR3/1)	粘質シルト 暗褐色ローム粒少量含む。中世陶器出土。

P17土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/1)	粘質シルト 耕作土を微量含む。
2	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト 暗褐色ローム粒微量含む。
3	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト 炭化物微量含む。柱痕跡。
4	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト ロームブロック多量含む。

P18土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト 暗褐色ローム粒微量含む。
2	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト 暗褐色ロームブロック少量含む。
3	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト 暗褐色ローム粒少量含む。柱痕跡。

P19土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト ロームブロック少量含む。

P20土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト ロームブロック少量含む。

P22・23土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト 炭化物微量含む。P23覆土。
2	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト 暗褐色ローム粒極めて多量含む。P23覆土。
3	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト ロームブロック多量含む。P22覆土。
4	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト ローム粒少量含む。柱痕跡。P23覆土。

P25土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト 暗褐色ローム粒やや多く含む。

P26・27土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/1)	粘質シルト 暗褐色ローム粒微量含む。P27覆土。
2	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト 黒褐色粘土少量含む。P27覆土。
3	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト 暗褐色ローム粒少量含む。P28覆土。
4	黒褐色	(10YR3/1)	粘質シルト ロームブロックやや多く含む。P28覆土。
5	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト ローム粒少量含む。柱痕跡。P28覆土。

P28土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト 暗褐色ローム粒少量含む。

P29土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト 暗褐色ローム粒少量含む。
2	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト ロームブロック多量含む。

P30土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/1)	粘質シルト 暗褐色ローム粒少量含む。
2	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト ロームブロックやや多く含む。
3	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	粘質シルト ロームブロック極めて多量含む。
4	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト ローム粒少量含む。柱痕跡。

P31土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト ロームブロック少量含む。

P32土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト 焼土粒微量含む。
2	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト ロームブロック多量含む。
3	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト ローム粒微量含む。柱痕跡。

P34土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト 暗褐色ローム粒少量含む。
2	黒褐色	(10YR3/1)	粘質シルト ロームブロックやや多く含む。
3	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト ローム粒少量含む。柱痕跡。

P35土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト 炭化物微量含む。
2	黒褐色	(10YR3/1)	粘質シルト 炭化物やや多く含む。

P38土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト ロームブロックやや多く含む。
2	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	粘質シルト 黑褐色土少量含む。

P39土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト 暗褐色ローム粒やや多く、炭化物微量含む。柱痕跡。
2	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト ロームブロック多量含む。

P40・41土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト ローム粒微量含む。P40覆土。
2	黒褐色	(10YR3/1)	粘質シルト ロームブロック多量含む。P40覆土。
3	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト ロームブロックやや多く含む。P41覆土。

P42土層注記

層№	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト ロームブロック少量、炭化物微量含む。
2	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト ロームブロックやや多く含む。

P43・44土層注記

層№	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/1)	粘質シルト 炭化物微量含む。柱痕跡。P43覆土。
2	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト ローム粒やや多く含む。P43覆土。
3	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト ロームブロック多量含む。P44覆土。

P45土層注記

層№	土色	土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト ロームブロック多量含む。
2	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト 炭化物微量含む。柱痕跡。

P46土層注記

層№	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/1)	粘質シルト 炭化物少量、ローム粒微量含む。
2	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト ロームブロック極めて多量含む。

P47土層注記

層№	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト 暗褐色ロームやや多く含む。
2	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	粘質シルト 黒褐色粘土少量含む。

P48土層注記

層№	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト 暗褐色ローム粒少量含む。
2	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト ロームブロックやや多く含む。

P49土層注記

層№	土色	土質	備考
1	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	粘質シルト 黒色粘土少量含む。
2	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト ロームブロック少量含む。柱痕跡。

P50土層注記

層№	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト 暗褐色ローム粒少量、炭化物微量含む。
2	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト ロームブロック多量含む。

P51土層注記

層№	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト 炭化物微量含む。
2	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト ロームブロックやや多く含む。

P52土層注記

層№	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/1)	粘質シルト ロームブロック少量含む。
2	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	粘質シルト 黑褐色粘土少量含む。
3	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト 炭化物微量含む。柱痕跡。

P53土層注記

層№	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト 暗褐色ローム粒やや多く含む。
2	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト ロームブロック多量含む。
3	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト ロームブロックやや多く含む。柱痕跡。

P54土層注記

層№	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト ローム粒微量含む。
2	黒褐色	(10YR2/1)	粘質シルト 炭化物やや多く、暗褐色ローム微量含む。

P55土層注記

層№	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト 炭化物やや多く、暗褐色ローム微量含む。
2	黒褐色	(10YR2/1)	粘質シルト 炭化物微量含む。

P56土層注記

層№	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト ロームブロックやや多く含む。

P57・58土層注記

層№	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/1)	粘質シルト 暗褐色ローム粒少量、炭化物微量含む。P57覆土。
2	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト ローム粒少量含む。P58覆土。

SD01, P59・60土層注記

層№	土色	土質	備考
1	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	粘質シルト ローム粒少量含む。SD01覆土。
2	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト ローム粒少量含む。P59覆土。
3	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト ローム粒極めて多量含む。P59覆土。
4	黒褐色	(10YR2/3)	粘質シルト ローム粒多量、炭化物微量含む。P60覆土。

P61・62土層注記

層№	土色	土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト ロームブロック少量、炭化物微量含む。P62覆土。
2	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	粘質シルト ロームブロック多量含む。P61覆土。柱痕跡。
3	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	粘質シルト ロームブロック極めて多量含む。P62覆土。

P63土層注記

層№	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト 炭化物多量含む。
2	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	粘質シルト ロームブロック極めて多量含む。

P64土層注記

層№	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト ロームブロック、炭化物少量含む。柱痕跡。
2	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト ロームブロック多量含む。

P65土層注記

層№	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト 暗褐色ローム少量含む。柱痕跡。
2	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト 暗褐色ローム多量含む。

P66土層注記

層№	土色	土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト 暗褐色ローム粒やや多く、炭化物微量含む。
2	黒褐色	(10YR4/3)	粘質シルト ロームブロック多量含む。

P67土層注記

層№	土色	土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト 暗褐色ローム粒やや多く含む。
2	黒褐色	(10YR4/3)	粘質シルト 暗褐色ローム多量含む。

P68土層注記

層№	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト 暗褐色ローム粒少量含む。柱痕跡。
2	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト 暗褐色ローム粒やや多く含む。

P69土層注記

層№	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト ロームブロック多量含む。
2	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト ロームブロックやや多く含む。

P70土層注記

層№	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト ロームブロック多量含む。
2	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト ロームブロックやや多く含む。

P71土層注記

層№	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト 暗褐色ローム粒やや多く含む。
2	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト ロームブロック多量含む。

P72土層注記

層№	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト 暗褐色ローム粒やや多く含む。
2	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト ロームブロック多量含む。

P73土層注記

層№	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト 暗褐色ローム粒やや多く含む。
2	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト ロームブロック多量含む。

P74土層注記

層№	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト 暗褐色ローム粒やや多く含む。
2	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト ローム

P78土層注記

層No	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト ロームブロック多量含む。
2	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト 炭化物や多く含む。柱痕跡。

P79土層注記

層No	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト 暗褐色ローム粒少量、炭化物微量含む。

P80土層注記

層No	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト 暗褐色ローム粒やや多く含む。

P81土層注記

層No	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト 炭化物微量含む。
2	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト ロームブロック少量含む。

P82土層注記

層No	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト 暗褐色ローム粒少量含む。
2	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト ロームブロックやや多く含む。

P83土層注記

層No	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト ロームブロック少量、炭化物微量含む。

P84土層注記

層No	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト 暗褐色ローム粒やや多く含む。

P85土層注記

層No	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト 炭化物微量含む。柱痕跡。
2	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト ロームブロックやや多く含む。

P86土層注記

層No	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト 暗褐色ローム粒やや多く、炭化物微量含む。柱痕跡。
2	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト 暗褐色ローム粒やや多く含む。

P87土層注記

層No	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト ローム粒微量含む。
2	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト ローム粒やや多く含む。
3	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト ロームブロック微量含む。
4	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト 黒褐色土微量含む。

P88・89土層注記

層No	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト 暗褐色ローム粒やや多く含む。P88覆土。
2	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト 暗褐色ローム粒極めて多量含む。P88覆土。
3	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト 暗褐色ローム粒やや多く含む。P89覆土。

P90土層注記

層No	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト 暗褐色ローム粒少量、炭化物微量含む。柱痕跡。
2	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト 暗褐色ローム粒やや多く含む。

P91土層注記

層No	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト 暗褐色ロームブロック多量含む。
2	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト 暗褐色ロームブロック多量含む。

P92土層注記

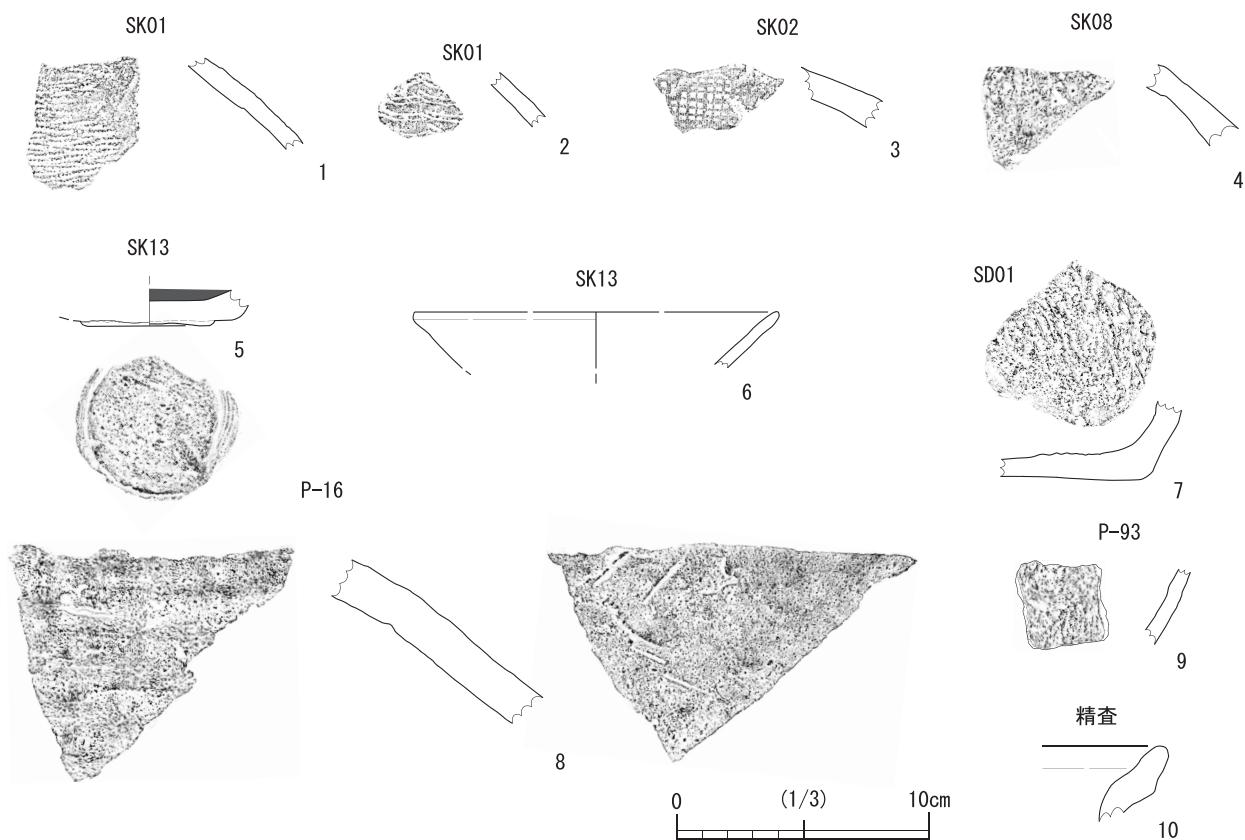
層No	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト ロームブロック微量含む。柱痕跡。
2	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト 暗褐色ローム粒やや多く含む。

P93土層注記

層No	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト 暗褐色ローム粒少量含む。
2	黒褐色	(10YR2/2)	粘質シルト ロームブロックやや多く含む。

とを踏まえると中世以降の所産と考えられる。

この小穴群では遺物はほとんど出土していないが、第10図9の弥生土器壺片がP93から、8の中世陶器甕片がP16から出土したほか、細片のため図示不可能であったがP07より器種不明の土師器片1点、同様にP12より器種不明の土師器片2点が出土している。



第10図 出土遺物観察表

No	出土位置	種別	器種	口径・長 (cm)	底径・幅 (cm)	器高・厚 (cm)	備考	写真 番号	登録 番号
1	SK01	弥生土器	壺	—	—	—	外:縄文(LR) 内:ナデ	6-5	川-4
2	SK01	弥生土器	壺	—	—	—	外面に半裁竹管による連弧文	6-7	川-5
3	SK02	陶器	甕	—	—	—	外面に格子状の押印 常滑焼・中世	6-8	川-7
4	SK09	陶器	甕	—	—	—	内面灰白色 内外面ナデ 在地産?・13C後半~14C代	6-9	川-1
5	SK13	土師器	壺	—	6.8	—	外底面に厚さ2mm、径5cmの粘土板貼付 内面黒色処理	6-3	川-8
6	SK13	施釉陶器	碗	14.5	—	—	内外面灰釉 大堀相馬・18世紀	6-1	川-10
7	SD01	施釉陶器	擂鉢	—	—	—	内外面鐵釉 内面に6条1単位の櫛目 磨滅顕著 在地産	6-4	川-6
8	P16	陶器	甕	—	—	—	内:ナデ・オサエ 在地産(白石)・13C後半~14C前半	6-10	川-3
9	P93	弥生土器	壺	—	—	—	外:縄文(LR) 内:ナデ	6-6	川-2
10	精査時	陶器	甕	—	—	—	口縁部内外面に自然釉 在地産(白石)・13C後半~14C前半	6-2	川-9

第10図 出土遺物

d. 遺構外出土遺物

今回の調査では、近現代における地形改変を反映してか、表土掘削時及び精査時でも出土遺物は少なかったものの、精査時には第10図10の中世陶器甕片が出土し、また表土掘削時には細片のため図示はしていないが染付皿・猪口、近世瓦片、砥石が出土している。

第IV章　まとめ

- ・上根崎遺跡は岩沼市長岡字上根崎に所在し、長岡丘陵から東に派生した尾根上及び谷地形斜面に展開する。
- ・調査では溝跡1条、土坑14基、及び小穴群を検出している。このうちSD01は調査区内でL字に屈曲することから、屋敷地などを区画する溝であった可能性が考えられる。
- ・土坑のうち、SK07・09・10などでは銭貨等の明瞭な副葬品は未発見であるものの、形状・規模からは土壙墓の可能性が考えられ、時期についてはSK09より中世陶器片が出土していることから中世の可能性がある。
- ・2基の方形土坑が重複しているように見えたSK13は、平面・土層断面観察から同一時期の廃絶が考えられる。このため遺構の機能としては地下室（ムロ）の可能性を推量している。
- ・102口を検出した小穴群の中には、柱痕跡を明瞭に留めるものも多数存在することから掘立柱建物や塀などが存在していたと考えられるが、調査面積が限られており、全容の解明については今後の課題である。時期については縄文土器、弥生土器を含んでいるものの、在地産中世陶器も近似した遺構覆土の小穴から出土しており、現時点では中世以降の所産ととらえている。
- ・今回の調査結果によって、これまで文献上でのみ表されてきた近世以前の長岡村が、丘陵の東側縁辺部まで展開していたことがうかがえるようになった。

註1 ここでは「佐藤孫右衛門」が「今村治部少輔」より長岡郷の一部を購入していたことが記されている。

また天文22年（1553）銘の『晴宗公采地下賜録』には、谷津新左衛門、富塚下総、小幡、松岡将監、

高橋信濃、猪俣神右衛門、阿部弥四郎などの人物が、長岡郷に所領を得ていたことが記されている。

このほか長岡郷の地名は『段銭古帳』でも認められている。

引用・参考文献

- 石黒伸一郎 2009 「岩沼市岩蔵寺の板碑を伴う集石遺構」『宮城考古学』第11号
- 岩沼市 1984 『岩沼市史』 岩沼市市史編纂委員会
- 岩沼市 1992 『岩沼市土地分類調査（細部調査）報告書・現況調査編』
- 岡田清一 2010 「岩沼市旧名取郡関連中世史料（稿）」『東北福祉大学岡田ゼミナール第16回地域調査報告会』資料集
- 小野力・志間泰治 1968 「装飾土器を出土した宮城県岩沼町所在の長谷寺横穴古墳調査報告」
『日本考古学協会第34回総会研究発表要旨』
- 鍛冶一郎・佐藤宏一他 1962 「宮城県岩沼町丸山横穴古墳群」『東北考古学 第3号』
- 川又隆央 2004a 『鵜ヶ崎城跡・第2地点』 岩沼市文化財調査報告書第3集
- 川又隆央 2004b 『鵜ヶ崎城跡・第3地点』 岩沼市文化財調査報告書第4集
- 川又隆央 2005a 『長徳寺前遺跡』 岩沼市文化財調査報告書第5集
- 川又隆央 2005b 『鵜ヶ崎城跡・第4地点』 岩沼市文化財調査報告書第6集

- 川又隆央 2005c 「靈場研究の方法」『遺跡研究の方法』東北中世考古学会第12回大会資料集
- 川又隆央 2005d 「宮城県の礫石経塚」『宮城考古学』第7号
- 川又隆央 2007 『朝日古墳群』 岩沼市文化財調査報告書第7集
- 川又隆央 2009a 『竹駒神社境内遺跡』 岩沼市文化財調査報告書第8集
- 川又隆央・熊谷篤 2009 「岩沼市中ノ原遺跡所在の板碑と出土資料について」『宮城考古学』第11号
- 川又隆央・熊谷篤 2010 『丸山遺跡』 岩沼市文化財調査報告書第9集
- 川又隆央・熊谷篤 2011 『西須賀原遺跡』 岩沼市文化財調査報告書第10集
- 川又隆央・小泉博明 2004 『下野郷館跡』 岩沼市文化財調査報告書第2集
- 菊地逸夫 2003 「陸奥の陶器生産・一本杉窯跡群」『中世奥羽の土器・陶磁器』 東北中世考古学会編
- 小村田達也・三好秀樹他 1993 『北原遺跡』 宮城県文化財調査報告書第159集
- 佐藤敏幸・大久保弥生 2007 「宮城県の湖西産須恵器」『宮城考古学』第9号
- 高野芳弘・佐藤和彦他 1985 「第47次調査」『多賀城跡』 宮城県多賀城跡調査研究所年報1984吉井宏他
2002 「鵜ヶ崎城跡（岩沼要害）・第1次発掘調査概報」 東北福祉大学
- 吉井宏他 2003 「鵜ヶ崎城跡（岩沼要害）・第2次発掘調査概報」 東北福祉大学
- 吉井宏他 2004 「鵜ヶ崎城跡（岩沼要害）・第3次発掘調査概報」 東北福祉大学
- 吉井宏他 2005 「鵜ヶ崎城跡（岩沼要害）・第4次発掘調査概報」 東北福祉大学
- 吉井宏他 2006 「鵜ヶ崎城跡（岩沼要害）・第5次発掘調査概報」 東北福祉大学
- 吉井宏他 2007 「鵜ヶ崎城跡（岩沼要害）・第6次発掘調査概報」 東北福祉大学
- 吉井宏他 2008 「鵜ヶ崎城跡（岩沼要害）・第7次発掘調査概報」 東北福祉大学
- 吉井宏他 2009 「鵜ヶ崎城跡（岩沼要害）・第8次発掘調査概報」 東北福祉大学
- 吉井宏他 2010 「鵜ヶ崎城跡（岩沼要害）・第9次発掘調査概報」 東北福祉大学
- 吉井宏他 2011 「鵜ヶ崎城跡（岩沼要害）・第10次発掘調査概報」 東北福祉大学
- 渡辺清子 2000 「引込横穴墓群発掘調査報告書」 岩沼市文化財調査報告書第1集

写 真 図 版



1. 堀削前状況（東から）



2. 堀削風景（北西から）



3. 調査風景（北西から）



4. 遺構確認状況（東から）



5. 全景（東から）

写真図版 1



1. 調査区東側全景（北から）



2. 調査区東側全景（南から）

写真図版2



1. SD01 (西から)



2. SD01 (東から)



3. SK01・02 (南から)



4. SK04・11 (南から)

写真図版3



1 . SK10 (西から)



2 . SK10完掘状況 (西から)



3 . SK13 (東から)



4 . SK13完掘状況 (東から)



5 . SK12 (南東から)



6 . SK08・09 (北から)

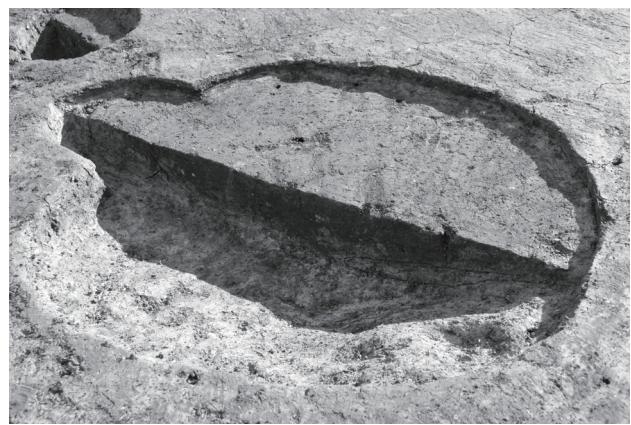


7 . SK07 (南から)

写真図版 4



1 . SK06 (西から)



2 . SK05、P69 (南西から)



3 . P32 (東から)



4 . P26・27 (東から)



5 . P37 (南から)



6 . P52 (南から)

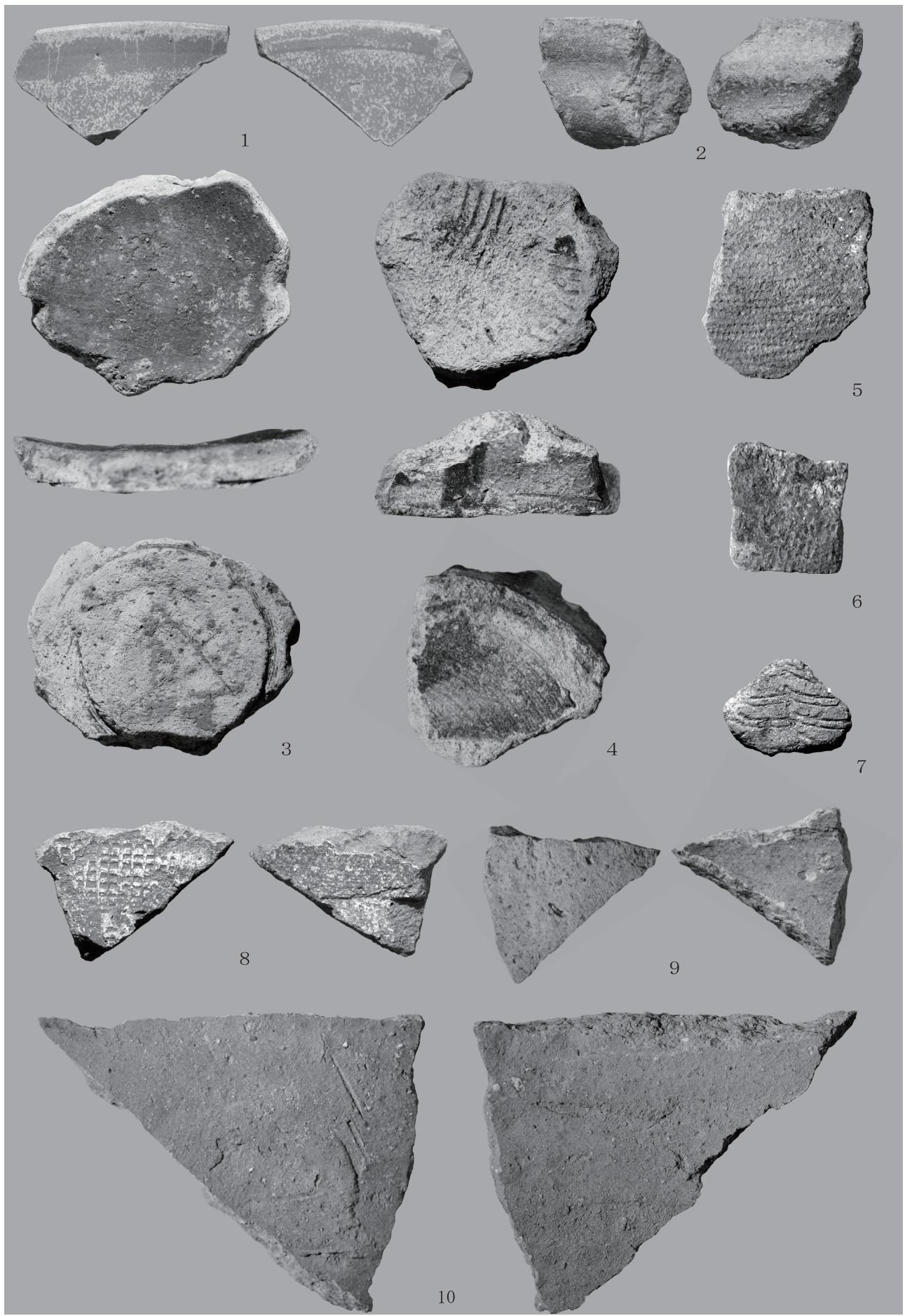


7 . P61・62 (西から)



8 . P74 (南から)

写真図版5



写真図版 6

報告書抄録

宮城県岩沼市文化財調査報告書第 11 集

上根崎遺跡

— (主) 岩沼蔵王線自歩道整備事業に伴う発掘調査報告書 —
平成 24 年 3 月

発行 岩沼市教育委員会

岩沼市桜 1 丁目 6 番 20 号

生涯学習課 TEL0223(23)1111 内線 573

印刷 株式会社 国井印刷

岩沼市藤浪 1 丁目 4 - 35

TEL0223(22)2221